

メディア、言語維持とゲール語

比治山大学現代文化学部教授

金野伸雄

通常ゲール語のような少数派言語にとって、メディアはなくてはならない防波堤だと考えられている。もっともゲール語を話すという行為に対してメディアがどのような支援となり、またその行為をどのように奨励しているのかという問題は明らかではない。ゲール語で放送されているTV番組を見る事と、見るという行為の（直接的あるいは間接的な）結果としてその言語の使用が増えるという事とは、全く別の問題である。言語維持を支援するためにメディアを利用するというやり方は、弱小言語の置かれている多くの状況でよく見られるものであるが、そのつながりが正確に言うところのように作用するのかについては研究が必要である。本論文ではこの点について考察をすすめ、この領域におけるメディアの役割をどのように評価するかという問題について論じ、さらにこの問題を究明することにつながると思われる研究指針を提案したい。

言うまでもなく、弱小言語にメディアのサービスを提供することは有利なことだという一般論は他にもある。この議論の中には、経済学の立場からのもの（弱小言語は通常開発の遅れた地域で使われているので、このような弱小言語を使用しているメディアへの投資はこの地域の経済の刺激策として効果的である）、人権の立場からのもの（「地域言語あるいは弱小言語に関する欧州憲章」や「言語の権利に関する世界宣言」等のような文書は、弱小言語のみならずそれらの言語内におけるメディアを提供することの重要性に対する認識が高まってきている事を証明している）、そしていわゆる文化生態学とよばれる立場からのもの（いかなる言語も、その喪失は言語資源、文化資源全体の減少につながるという意味で人類全体にとっての損失である）が含まれる。また、英国においては公共放送サービスの特質も考慮にいれなくてはならない。その組織理念からみると、現在ゲール語に対してなされているメディアサービスよりも質のいいサービスが提供されるように思える。BBCの公共放送サービスとしての使命によれば、より完全なゲール語によるサービスは、これまで視聴者が享受していた以上のサービスをおおむね提供している新しいデジタルチャンネルの開発に優先すべきであると示唆されている。論ずるだけなら簡単な事だ。しかしながら本論文の関心は、言語維持の問題とゲール語の生き残りにメディアが如何に直接的に関わるかという点にしかない。

この問題を決定的にする要因が何かは明らかであろう。それは財政問題である。スコットランドでは、もしゲール語メディアが（単にゲール人を楽しませたり、たとえばゲール文化の媒介役として働くのではなく）ゲール語の支援を目的としているのであれば、ゲール語メディアのための限られた財源を如何に利用するかが問題になる。ゲール語のための財源が潤沢にある世界であ

れば、メディアが如何にゲール語を支援するかという問題はさほど重要ではない。しかし財源が限られた現実世界においては、その財源が教育、コミュニティ支援、それにメディアなどの領域に如何に分配されるかはきわめて重要な問題なのである。

言語維持におけるメディアの役割を評価する議論

ゲール語のためのメディア利用に関する基本的考え方は Donald MacKinnon が BBC スコットランドのゲール語部長であった時の議論によく表われている。「成熟した放送サービスが世界のあらゆる弱小言語にとって、その再生と生存の鍵となる要素であると考えられている。」(The Herald, 10 June, 2004) この考えを支持する以下の7種の議論はきわめて有名であり、引用される事も多い。

第1に、メディアは創造的、文化的産業に魅力的な活動を提供するだけでなく、経済的な膨張をも生み出す事ができる。これは早い時期になされたより一般的な議論の一つであり、1980年代後半においてゲール語テレビ放送の推進者たちが用いた議論である。ウェールズの S4C (1982年開局したウェールズのTV局)の経験で弱小言語経済が如何に利益を受けるかが証明された。ゲール語文化圏では教育外で言語を使う事のできるキャリアが乏しいために、メディアは特に重要なのである。

第2に、メディア、特にテレビは、政治的にも社会的にも、現代生活の中心にある。別の言い方をすると、メディアはいわゆる公共圏 (the public sphere) —公共性のある事柄について十分な情報のもとに議論が行われる領域—といわれるものの基盤を形成している。この議論ではニュースと時事問題についての情報提供が重要な役割を果たしている。このことはどのコミュニティであれ現代生活に十分参加するために、メディアが必須の基盤を提供していることを示唆している。これはバイリンガルな社会においても当てはまる。もしゲール語話者がゲール語で公的問題(特にゲール語コミュニティに直接影響する問題)を議論できる場をメディアが提供しなければ、英語への依存度が高まるだけである。

第3に、メディアはその文化が現代生活に参加できるかどうかの能力の指標として機能する。これは前の議論の一つのバリエーションであるが、政治よりむしろ文化に関係が深い。ゲール語話者は高齢で田舎者であるという伝統的な固定観念(他の多くの弱小言語と共通している)があるものの、これは若者たちがゲール語に関わるようにさせるためにきわめて重要なものである。他でも指摘したように、ゲール語TVではしばしばゲール語を話す人々のもっと現代的な姿が強調されてきた。(Cormack (1994)はこの点について初期のゲール語TV委員会との関連で議論している。)これにはもちろん危険もひそんでいる。Robert Dunbar は、現代文化において何が sexy で何が cool かを規定するのは、通例多数派言語であることを力説している。(Dunbar, 2003)

第4に、メディアは集団のアイデンティティを創出し維持するために重要な役割を演じることができる。Dunbar は「たとえば放送というものは、弱小言語コミュニティのアイデンティティの定義づけを助け、またその中心的価値を定め補強するのを支援することにより、イデオロギーの面で重要な役割を果たすことができる。」と述べている。(Dunbar, 2003) この事は Radio nan Gaidheal (BBC ラジオ放送、スコットランドのゲール語による放送局) において顕著である。ここでは比較的統一化されたゲール語話者としての視聴者が存在しているという強い感覚がある。このようなアイデンティティ感の重要性は無視されるべきではない。ゲール語話者のアイデンティティ感覚が強くなればなるほど、ゲール語が盛んになる可能性が高いからだ。

第5に、単に言語の多くの部分を公共領域に置き、その多くを録音しあるいは録音可能な状態におくことによって、メディアは言語維持の努力のための重要な基礎を提供するのである。書物に書かれている言葉とは異なり、話し言葉はすべての人の手に入るのである。この事は母国語話者が勇気づけられるものであり、学習者にとっては助けとなる。

第6は、いわゆる言語学者がいうところのコーパスプランニング、すなわち言語の基準や標準の確立におけるメディアの役割に関係する。この点において Radio nan Gaidheal は永年にわたり重要な役を演じてきた。過去 Radio nan Gaidheal で展開されてきた William Lamb の言語習慣に関する議論のなかで、この点が明らかにされている。(Lamb, 1999)

第7に、マスメディアは、程度の差こそあれ言語に基盤を置いており、従って話し言葉であれ書き言葉であれ、言語の使用を奨励するという意味において重要である。新聞にゲール語の記事がのっていることあるいはTVにゲール語の番組があるということが、ともかくゲール語の使用を奨励することにつながるはずだと考えられることが時々ある。

目下ゲール語を話す視聴者がゲール語放送から何を期待しているかという Catherine Ann MacNeil の記事で、以上の議論と重なる多くの問題が指摘されている。MacNeil はゲール語を話す視聴者の期待に関し、次のような6つの要素を指摘している。

ゲール語を話す視聴者はTV やラジオ番組に対して次のような期待を抱いている:①ゲール語の基準を示す ②子供に関する条項のなかで道徳的価値を支える ③家庭におけるあらゆる年齢層やカテゴリーの学習者に対し言語的支援をする ④純粋なゲール語コミュニティ、とくに慣用的なゲール語に触れる機会を提供する ⑤ゲール語の使用を教室外に広げる ⑥伝統的かつ現代的なゲール語文化を推進する。(MacNeil, 2003)

これらはもちろん期待や希望であり、必ずしも達成されているわけではない。

先ほどの7つの議論について、次の2つのコメントが意味をもつだろう。第1点は、最後の第7を除いていずれも直接的に言語使用を奨励するものではない。第1から第6までの議論はすべ

て、言語が栄えるような環境の創出と関連した議論である。第2点は、これらの議論と言語維持の努力の成功（あるいは失敗）との関連を示す明確な証拠は存在しない。これは特別驚くべき事ではない。メディアの受容は複雑なプロセスであり、多くの要素が関わっている。たとえば、消費者個人の心理、メディアの摂取が起こる直接の社会環境やより広い国家的かつ地域的環境、それと並びメディア制作者のなかで作用しメディアテキストそれ自体に影響を与える多くの要素など。同様に言語維持は複雑で、関連する要素が幅広く存在する。これら2つのプロセスを合わせて考えると、メディアと言語維持に関し正確な見解を述べる事は難しいということが明らかになるだろう。この事からまた先ほど述べた7種の議論がすべて、実証的に明らかにされた議論というより提案に近いものである事が分かるであろう。2001年に実施されたいささか失望を禁じ得ない世論調査の結果を目の前にすると、根拠の必要性が痛感される。

メディアの役割に対する疑念

メディア批判、とくにTVに関するものは、しかしながら、前節の肯定論と比べると、あまり認識されていない。もっとも、言語維持におけるメディアの役割に関する Joshua Fishman の疑念はよく知られてはいる。(Fishman, 1991; Fishman, 2001) ここでは、4種類の議論を取り上げておく。

第1に、メディアの経済学は多数の視聴者を求める。ことにTVの場合、その傾向が顕著である。(これは商業放送のみならずBBCについてもあてはまる。なぜかという、視聴者の数があまりにも少ないと、ライセンス料の維持が危うくなるからだ。) 視聴者の数をできるだけ増やす事を目指した番組制作への圧力がいつも存在しているようだ。そしてマルチチャンネルのデジタル放送の出現はこのプレッシャーをそれだけ増大させるだけである。というのは既存の番組放送者は自分たちの放送番組の規模を維持する事にやっきとなるが、一方でそれがより多くの断片に切り刻まれる可能性は着実に増大しているのである。Angus Peter Campbell がここに潜む危険性を指摘していることは、忘れてはならない。

最近インバネスで開かれたゲール語のデジタル放送に関する会議で、午前中半ばにわたしは次の事に気づいた。すなわち、私が実際に参加していたのは、偶像崇拜的なパール神礼拝の儀式であって、われわれはみんな市場経済という高壇にひざまずいていたのだ。(Campbell, 2002)

ゲール語TV放送は決して経済性とは相容れない。放送者たちがこれにどのように反応するかはTVの果たす役割に重大な影響を及ぼす。

第2に、各メディアはそれぞれ自身のジャンルとフォーマットを持っており、それは必ずしも弱小言語文化に最適とは言えないかもしれないし、また言語使用を奨励するのに相応しいとは言えないかもしれない。実際、クイズ、ゲーム、連続メロドラマ、連続ホームコメディなどTV長寿番組の多くは、これまで何年にもわたってまさに文化的色合いの希薄な、国際的なフォーマットとして発達を遂げてきたのであり、国が変わってもたやすく適応できるのである。現在見られる、数々のリアリティTVとかライフスタイルTVというフォーマットは、大衆的なフォーマットがどのように世界中に展開していくか、またその一方で個々の文化や国に特有の内容を包含しながらも、実際には差異はきわめて小さくなることを一層明快に示してくれている。このようなフォーマットがゲール語文化のような存亡の危機にある弱小言語文化と如何に相互に作用するか、少しも明らかになってはいないが、最低限視聴者を多数派言語文化に引き寄せる可能性がある事だけは言えそうである。これはもちろんいくつかの点に於いて、TVの経済学について述べた先の議論の単なる展開に過ぎない。このようなフォーマットの採用は商業的理由によっているからである。

第3に、メディアでゲール語が使われているからといって、必ずしも人々がそれを話す事を後押しすることにはつながらない。このことはとくにスーパーを使うTVの場合に当てはまる。もしゲール語の会話が奨励されない状況でTVが視聴されているのであれば(たとえばゲール語の会話が通常行われていない家庭で)、番組中にゲール語が現れてもその影響は小さいであろう。要するにTVをみる環境が重要なのである。この事はもちろん、番組が放送されるコミュニティの重要性が強調されているだけのことである。インターネットに関する限りでいえば、BBCスコットランドのJulie Adairがゲール語のしゃべり場で英語が広範囲に使用されている点を指摘している。(Cormack, 2004)

最後に、今日のようなマルチチャンネルの時代においては、TVは視聴者を一つにするというよりむしろ分断化する可能性の方が益々強くなってきている。伝統的に見ると、主たる公共放送TVは殊に祝祭や危機の時に国民を一体化させる手段として考えられていた。TVはアイデンティティを維持する手段と考えられていたのである。(しかもゲール語放送やゲール語コミュニティのアイデンティティに関する議論には既に言及済みである)しかしながら、より多くの人を選択すべきより多くのチャンネル—その多くが何らかの専門チャンネルである—が与えられるにつれ、そしてリモコンによりチャンネル飛ばしが頻繁に行われるにつれ、TVがもっていた伝統的な役割に変化が生まれつつあるように見える。それが持っている本質により、デジタル放送はどのコミュニティにおいても聴衆を分断化するのである。

それゆえおそらく小規模メディアの可能性が強調されるべきである。このようなメディアの場合には地元コミュニティとの相互作用がよりうまく作用しそうであるし、したがって先述した困難のいくつかを避ける事ができそうである。しかしここにも問題がある(聴衆のゲール語話者の大

部分が今ではこのモデルが想定するようなゲール語コミュニティに住んでおらず、実際にはスコットランド中、ことに都会に分散して暮らしている)。このようなメディアの歴史をみても、決して希望は持てない。過去40年間にコミュニティ新聞、地方ラジオ、ビデオワークショップ、地域のケーブルTV局、地域のTV局、それに現在ではインターネットやその他のマルチメディアが発達してきている。しかしながら、大規模メディアと競合の上これらの小規模メディアが成功したという事例はほとんどない。これらは多くの人々がメディアの中で慣れてきた製品価値を持ちあわせていないのである。たとえ成功をおさめても、この種のメディアは通常、より巨大でより商業主義的な組織に乗っ取られてしまうのだ。そしてもう一つ重要な点がある。つまり、メディアの制作や配給の面におけるいかなる技術的發展も、たとえそれが弱小言語を支援するために使われたとしても、利用可能な主要言語によるメディアを増大させる事になってしまうのである。たとえば、①ビデオによってビデオワークショップがうまれたが、同時により多くのハリウッド映画が家庭に流れ込んできた②地域のラジオは国際的なポップスに占領されてしまった③ケーブルTV (Gaidhealtachdにおいてはもちろん選択肢にない) はアクセスチャンネルをもたらしたが、同時に他の多くのチャンネルをももたらした(財政問題が生じたとき最初にカットされるのはしばしば地方のアクセスチャンネルである)。いまやデジタル放送やインターネットとともに、小規模なメディアの視聴者をあらたに生み出す機会となっているだけでなく、メディアの英語コンテンツを増大させる事にもつながっている。新しいメディアシステムはメディアで利用可能なゲール語を増大させるために使う事ができるが、同時に人々がこのような新しいシステム(デジタルTVやインターネットなど)を手に入れるにつれ、彼らがより多くの英語メディアを手に入れるようになる事は避けられないことである。メディアの中でゲール語の量が増大するにもかかわらず、メディアに於けるゲール語の相対的な比重は低下するであろう。

メディアに於けるゲール語に関して時になされる、未だ証明されていない想定がこれらのことから2つ示されている。1つは、ゲール語による(TVやラジオ番組のような)メディアコンテンツが多くなればなるほど、ゲール語の使用頻度がより多くなるという想定である。この点は確かにTVについては明らかではない。TVによってより多くの人々がゲール語との距離が近くなるのか。通常これはゲール語学習者が第1に挙げる理由ではない。また、そのことによって人々のゲール語による会話がふえるのか、あるいは殊に重要な10代から20代の世代に属する子供たちがゲール語と身近にふれあう事ができるのか、明らかではない。第2は、メディアの領域が広がれば(新聞や既存の放送だけでなく、ウェブサイトやデジタル放送など)言語の使用機会が広がらざるを得ない。ここでもまた、単にウェブサイト上でゲール語が増えても、ゲール語話者の数を維持することにつながる可能性はほとんどない。実際、異種のメディアが実質的に競合関係(例えばスケジュールの衝突、あるいは異種のメディアによる同種のコンテンツの提供)にある場合も、その効果は累積的にはならない。

これまでの議論は、少しもゲール語メディアを批判するためのものではない—ただゲール語話者の数を支えるためにメディアにおいてゲール語がなしうる役割に対し、素朴な期待は無用であることを言いたいだけである。ゲール語メディアを提供するには他の理由もあり、メディアが言語維持のための有効な手段として利用されるのは首肯できる。しかし、これまでのところこれには証明がなされていない。

視聴者を求めて

以上の事から視聴者の研究というものが如何に重要かが明らかになった—すなわちメディアに於けるゲール語がゲール語を話すという行為と如何に関わっているかという研究である。しかしながら、このような研究に関わりをもつ一般的な問題も存在している。歴史的にいうと、メディア研究に於ける最重要課題であるにも関わらず、視聴者に与えるメディアの直接的影響についてはまだ十分に解明されてはいない(その理由は既に述べたようにそのプロセスの複雑さにある)。これまで議論されたことのない結果というものはほとんどない。単に頭数を計測すること、あるいは限定的ではあってもある有益な情報を与えながら、好悪に関する率直な質問をすること、このようなやり方では何が言語維持に影響を与えているかを決定するのに必要な情報を得られそうにはない。ここで重要なのは、視聴者の人数でも、視聴者の番組に対する態度でもない。むしろ、その番組がどのようにしてゲール語を話す行為につながっているかという事である。メディアに対して視聴者がゲール語を話すようになるという結果を求めることは、元来メディアが目的としていたものではない何か別の事をメディアに対して求めているも同然だ。それはすなわち、態度に関わる長期的な結果であるのと同様、直接的な行動に関わる結果でもある。これに関しBBCの組織スローガン(Royal Charterに書かれている)—情報を提供し、教育し、そして楽しませる—が示唆的である。このどれをとってもそのような直接的な行動の結果を目的としているわけではないが、メディアに関するあらゆる研究の中で直接的な行動の結果に関する研究はきわめて論争の多い領域である。(もっともある言語を話すよう促す事は直接的な影響を及ぼす行為—つまり個別の番組が言語の使用を直接刺激するという意味—であるが、さらに重要な事に—このような番組の累積的効果の結果、言語のより一般的な使用が促される事になるだろうから—より長期的かつより直接性の薄い効果を持つとも考える。)TV番組の中で最も話題になった番組、したがって実際その言語を話すようにさせる可能性が最も高いと考えられていた番組、というのは議論の多い番組で、例えばリアリティショーやトークショー、連続ドラマなどである。しかし先ほど指摘したように、こういった番組はきわめて文化的特殊性の薄い番組である。連続ドラマのような番組ですら、特定の場所に設定されているにもかかわらず、どこからとって来ようが、その語りの技法、登場人物の種類、プロットラインは同じなのである。その地域の文化は国

際的なフォーマットの中のほんの部分的な色づけにすぎない。

最近の視聴者研究の中で、media culture という概念を用いて視聴者をとらえる興味深い見方を提案しているアプローチがある。つまり、メディアがどのようにして我々の生活に適応するか、我々がどのようにメディアを利用しそれについて議論するか、またメディアが他のメディアをどのように話題にするか（たとえば、新聞の中の TV 批評、あるいはもう少し上品さを欠くが大衆雑誌の TV パーソナリティ狂いなど）である。このようなアプローチは民族誌学的研究や受容研究といった、従来の伝統的視聴者研究を超えようという試みの一つである。Pertti Alasuutari (1999) は単なる視聴者の反応にとどまらない、このようなメディア文化研究の必要性を強く主張している。

目的は現代のメディア文化 (media culture)、とくに日常生活に於けるメディアの役割として現れるそれを把握する事である。これはメディアについて議論がなされる談話により構成される、あるいは逆にその談話を構成するところの話題であり行為でもある。

メディアの摂取がどのようにより大きな言語環境の一部となっているか、この事が重要なのである。これはメディアコンテンツが視聴者にどのように利用されているかということでもある。さらに最近 Sonia Livingstone が次のように論じている (2004)。

スクリーンの前に存在する社会環境がスクリーン上に浮かんでいるものとの関わり方を形づくるだけでなく、人々はメディア文化を形成することに積極的であり、それについては詳しい説明が可能である。

言い換えれば、このような研究は人々の反応をみるだけでなく、メディアの利用に関する社会環境全体、そしてそのような環境が視聴者によってどのように創出され展開されているかをみているのである。

この議論は、しかしながら、ゲール語メディアの視聴者とはだれなのかという問題を提起している。ゲール語視聴者を構成する 3 要素を対比させてみると、次のようになる。

- ① Ness, Scalpay, Barra や Staffin などまだゲール語が毎日話されている地域の住民
- ② ことに Gaidhealtachd とよばれゲール語の核と言われている地域の外側に位置する Glasgow のような都市に居住している、いわゆる emigré Gaelic audience (転出ゲール人視聴者)
- ③ ゲール語学習者としての視聴者 (ゲール語話者の数が安定化というより増加に転じるべきだとすれば、このグループの重要性はますます高まっていく)

視聴者として①と②はきわめて異なった状況におかれている。さらにこれら視聴者はともに視聴者③ともはっきり対比される。

Alasutari により提唱されたこのアプローチは、ゲール語が現在も地域言語であるハイランドや島嶼部などによって代表される地域にもっとも適切なアプローチであるが、他の集団やことに学習者も忘れてはいけない。メディア文化という概念はまた、メディアが利用されている異質の環境に対して我々を敏感にさせ、ゲール語メディア視聴者の質の違う部分—たとえば Eòrpa (TV BBC2 スコットランドで放送されている時事討論番組 スコットランドのゲール語により放送されている) を観る人たち, Coinneach Maclòmhair (ラジオの BBC スコットランドで放送されている時事討論番組) を聴く人たち, An Gàidheal Ùr (スコットランドで発行されているゲール語の新聞) の読者たち—同士の相互の働きかけについて考えさせてくれる。このような質の異なった視聴者が複雑かつ多様な方法で重なり合っていることは疑いのない事であり、この重なり合いが重要な要素であるという事は十分納得のいく事である。

研究のための指針

これまでの議論から、単に視聴者数を数えるとか、ゲール語番組に関して何を選択するかという伝統的方法とはいささか異なる方法が、ゲール語に対するメディアの影響を研究する方法として有効である事が分かってくる。(伝統的な研究方法にまだ果たすべき役割はあるが) このアプローチは以下の方法を包含している。①お互いに交流するために人々がメディアをどのように利用しているかの研究②ゲール語メディアについての議論で、人々がどの言語を使いどのような環境を選ぶかの研究③メディアに於けるゲール語の使われ方に関してゲール語話者がとる態度の研究④ゲール語メディアに人々が加わる方法の研究、例としては電話、編集者への手紙、スタジオで直接観るなど⑤ゲール語話者がゲール語によらないメディアとどのように交流するかの研究(ゲール語メディアがゲール語の使用を促すとすれば、英語メディアも同様なのか) ⑥ゲール語メディアがどのようにして人々に自分がゲール語話者であると感じさせるのかの研究(前述したアイデンティティとコミュニティの問題に立ち返る問題である)。

方法論的に言えば、このような研究では集団や個人に対する徹底的な聞き取り調査が必要になる。同時に単なるワンワード、ワンセンテンスの回答ではなく、十分かつよく考えられた回答を引き出すよう工夫されたアンケートが必要である。ここで David Morley (1992)が実施して有名になった、メディアを見ている状況でのグループディスカッションが有益になってくる。

これはまたメディアの異なった見方というものも示唆している。すなわち①メディアに於いてゲール語を使うのは誰か②ゲール語のどのような使用域や方言が使われるのか③メディアの中

にゲール語社会のどのような面が現れているのか、また現れていないのか④一番よく現れるのはどこの地域なのか⑤非ゲール語メディア（例：映画、新聞、英語のTV連続ドラマ）の中でゲール語はどのように映り、またどのように言及されているか、以上のような5つの研究である。ゲール語という言葉が国全体でどのような扱いを受けているかを考える上で、第5の視点が重要である。これは同時にゲール語メディアの消費者の大部分は、また英語メディアの消費者でもあるということのを思い起こさせてくれるのである。

これらすべてにおいて目的とされているのは、ゲール語の使用を促す可能性が最も高いのは、どのような種類のメディアなのか、どのような種類のメディアコンテンツ、メディア環境なのかということである。ゲール語のTVが増えれば増えるほど自動的にゲール語の存続にプラスとなる、などと単純に考える事はできない。必要とされているのは、質の異なったメディア同志の相互作用や視聴者の中の多様性（もしまず第1に番組そのものが不人気であれば、いかなるプラスの作用も生まれない事はもちろん忘れてはならないが）に配慮しつつ、実際に言語使用を促すようなメディアコンテンツである。このような研究から得られる情報なくしては、かりに当て推量自体が精巧なものであっても、メディア計画を当て推量以上のものであると考えるのは困難である。しかしながら、ゲール語のおかれている現況や利用可能な財源を考えると、このような当て推量さえも事実上手にする事のできない贅沢といえよう。

おわりに

本稿は言語維持の視点からメディアとゲール語の関係を論じた Mike Cormack (Course Leader in Gaelic and the Media at Sabhal Mòr Ostaig) の論文 ‘The Media, language maintenance and Gaelic’ (*Revitalising Gaelic in Scotland*, ed. Wilson McLeod, Edinburgh: Dunedin Academic Press, 2006, pp.211-219) の紹介を試みたものである。

参考文献

- Alasuutari, Pertti (ed.) (1999) *Rethinking the Media Audience: The New Agenda*, London: Sage.
- Campbell, Angus Peter (2002) 'Shoeless', *The Scottish Review*, Vol.2, No.5, pp.34-46.
- Cormack, Mike (1994) 'Programming for Cultural Defence: The Expansion of Gaelic Television', *Scottish Affairs*, No.6, pp.114-31.
- Cormack, Mike (2004) 'Gaelic in the Media', *Scottish Affairs*, No.46, pp.23-43.
- Cormack, Mike (2005) 'The Cultural Politics of Minority Language Media,' *International Journal of Media and Cultural Politics*, vol.1, No.1, pp.107-22.
- Dahlgren, Peter (1995) *Television and the Public Sphere: Citizenship, Democracy and the Media*, London:Sage.
- Dunbar, Robert (2003) 'Gaelic-medium Broadcasting: Reflections on the Legal Framework from a Sociolinguistic Perspective', in Kirk and Ó Baoill (2003), pp.73-82.
- Fishman, Joshua A. (1991) *Reversing Language Shift: Theoretical and Empirical Foundations of Assistance to Threatened Languages*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Fishman, Joshua A. (ed.) (2001) *Can Threatened Languages be Saved? Reversing Language Shift, Revisited - A 21st Century Perspective*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Habermas, Jürgen (1989) *The Structural Transformation of the Public Sphere*, Cambridge: Polity Press.
- Lamb, William (1999) 'A Diachronic Account of Gaelic News-speak: The Development and Expansion of a Register', *Scottish Gaelic Studies*, Vol. 19, pp.141-71.
- Livingstone, Sonia (2004) 'The Challenge of Changing Audiences: or, What is the Audience Researcher to do in the Age of Internet?', *European Journal of Communication*, Vol. 19, pp.75-86.
- MacKinnon, Donalda (2004) Excerpt from *The Herald*, 10 June, 2004.
- MacNeil, Catherine Ann (2003) 'The State of Gaelic Broadcasting in Scotland: Critical Issues and Audience Concerns', in Kirk and Ó Baoill (2003), pp. 60-6.
- Morley, David (1992) *Television, Audiences and Cultural Studies*, London: Routledge.